



第108号

北海道ポーランド文化協会会誌「ポーレ」

2023.1.20



第104回例会
第105回例会



ポーランドの
名作映画2本!

ビデオ鑑賞&交流会 2023

『エロイカ EROICA』

1958 | ポーランド | 白黒 | 87分
アンジェイ・ムンク監督

代表作『パサジェルカ』(1963)撮影のためアウシュヴィッツ収容所からの帰途、39歳の若さで不慮の事故死を遂げた名匠の傑作。同じワルシャワ蜂起を取り上げながら、アンジェイ・ワイダ監督の『地下水道』(1957)とは違ってレジスタンスの人々をシニカルに描いた。題名はベートーヴェン交響曲第3番『英雄』(別称『エロイカ交響曲』1804)から。

2023. **2/20** (月) 18:30~

札幌エルプラザ 4F 中研修室

第一話「ポーランド風スケルトン」の主人公、陽気な中年男ジジュシ(エドヴァルト・ジェヴォンスキ)は国内軍兵士の任務を放棄しハンガリー軍の伝令を引き受けたものの、危険な戦闘地域を通り抜けて自宅と国内軍司令部との間を数回往復するはめになる喜劇的な話。



第二話「オスティナート・ルグーブレ(悲痛な執拗反復)」はドイツ軍の捕虜となりアルプスの将校用収容所に送り込まれた軍人の悲惨な姿を描く。ワルシャワ蜂起で闘った新参の将校達は英雄主義を捨てる必要があると自覚しているが、開戦時から捕虜の古参将校達は過去の栄光にこだわり、収容所からの脱走に唯一成功したザヴィストフスキ中尉(タデウシュ・ウォムニツキ)を英雄視しているが、実は…。

一見対照的な二つの物語は、両者とも「英雄主義のための英雄行為」に距離を置いた冷静な批評家精神に満ちている。ムンク作品に特有の滑稽さと憐憫の情が同時に表現されているとともに、故国の歴史に向ける冷徹な視線は、その人間描写の深さと鋭さにおいて卓越している。

『イマジン IMAGINE』

2012 | ポーランド/ポルトガル/フランス/イギリス合作
カラー | 105分 | アンジェイ・ヤキモフスキ監督
ワルシャワ国際映画祭 監督賞・観客賞

ポルトガルの美しい古都リスボンの視覚障害者施設に“反響定位”という方法で白い杖を使わずに歩ける視覚障害者のイアンがやって来る。生徒達を危険にさらさぬことを条件に、イアンは教師として採用され、子供達にこの技術を教え、外の世界に出ることの素晴らしさを伝えていく。

2023. **3/13** (月) 18:30~

札幌エルプラザ 4F 大研修室

引きこもりがちだった女性エヴァもイアンに興味を抱き、彼の技術を学んで二人で街へ出かけバーでワインを楽しむ。イアンは「近くに港があり大型船が入りしているはず」とエヴァに話す。だが、そんなイアンの授業が、生徒達の安全を第一に考える診療所側にとって懸念すべき問題になりつつあることを彼はまだ知らない。イアンの言う「船」は本当に存在するのだろうか。そして二人の行く末は…。



夜のリスボン港や坂の多い旧市街と市街電車は実に詩的で絵になる風景だ。音響設計が素晴らしく、これほど盲目の方の気持ちに寄り添った映画は珍しい。

監督はポーランドの若手を代表する気鋭の映像作家。アウトロー的な風貌でイアン役を演じたエドワード・ホッグは、日本では本作以外あまり知られていないが英国王立演劇学校出身の演技派。エヴァ役のアレクサンドラ・マリア・ララは、幼少時チャウシェスク政権の圧政を逃れ家族とともに移住したルーマニア系のドイツ女優。『ヒトラー最後の12日間』(04)の秘書役、『コッポラ胡蝶の夢』(07)の一人3役は忘れがたい。

(池田光良)

入場無料、予約推奨、連絡先 : hokkaidopolandca@gmail.com, 011-384-5984 (園部、Fax 兼)

豊平館で創立 35 周年を祝いました！



2022.10.30 《第36回定例総会》(出席者20人・委任状49通/会員数99人)では、各議案が過半数の賛成で議決されました。詳細は10～11頁をご覧ください。

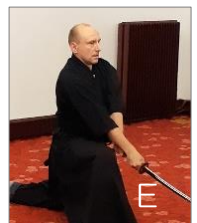
《創立35周年祝賀会》には44人(うちポーランド人・家族20人)が参加しアトラクションを楽しみました。シロンスク舞踊団から祝辞を頂きました。

▶スライドショー「本会の35年」(小笠原正明、ジェプカ・ラファウ)、「NNW 国際映画祭 @グディニヤ」(浅野由美子)

- ▶イベント紹介「ポーランド・アイヌ『祖霊祭』夜明け前/シンストラッパ・クンネニサツ」2022.11.28(丸山博)
- 「創立35周年記念演奏会」2023.6.3(ピアノ演奏:安藤むつみ、坂田朋優・鈴木飛鳥 =写真 A=、徳田貴子)

———— ポーランドのみなさんのパフォーマンスにも拍手！があふれて ————

- ▶歌(ソロ)数井バルバラ:ヴァリウス・マヌクス「夜の歌」 Varius Manx “Piosenka Księżycowa”, (皆で)リシャルド・リンコフスキ「電車が走っている」 Ryszard Rynkowski “Zwierzenia Ryśka Czyli Jedzie Pociąg” =写真 B&C=
- ▶詩(朗読)佐藤レミリア:ヤン・ブジェフファ「変なアヒル」Jan Brzechwa “Kaczka dziwaczka”, オレーヤージュ・シルヴィア:ハリナ・ポシフャトフスカ「多くの簡単な単語が必要」 Halina Poświatowska “Trzeba nam dużo prostych słów” =写真 D=
- ▶パフォーマンス:フバチ・ロベルト/居合の技 =写真 E=
- ▶パズル・クイズ:ポーランドの街・日本の街など (安藤厚、写真 尾形芳秀)



木村和保(Kazuyasu Kimura-Piłsudski)氏逝去

かねてより白血病と格闘中だった木村和保氏は2022年12月14日夕刻、合併症のクモ膜下出血により急逝された。享年68。和保氏が代表取締役を務めたケーシーエンジニアリング社と木村家の合同葬(19日通夜、20日葬儀)は、新横浜総合斎場にてしめやかに執行され、パヴェウ・ミレフスキ駐日ポーランド共和国大使、ウルシュラ・オスミツカ・ポーランド広報文化センター所長、田澤守エンチウ協会々長、安藤厚本会々長からも弔電が寄せられた。

ブロニスワフ・ピウスツキの孫である和保氏は1980年代以降、日本におけるピウスツキ家の当主として国内外で取材に応じ、4度の B・ピウスツキ国際会議でもその重責を全うされた。99年からはブロニスワフの実弟ユゼフ・ピウスツキ元帥の孫たちと親戚付合いを開始、家族ぐるみの交流を重ねていた。和保氏はピウスツキ家全体で最後の男系嗣

子だったから、ポーランドでは Kazuyasu Kimura-Piłsudski と称されることもあったが、由緒正しいリトワニア系ポーランド士族のピウスツキ家はかくて終焉を迎えた。



2017年4月、和保氏は祖母(ブロニスワフの妻)チュフサンマの叔父・木村愛吉/バフンケの遺骨返還を北海道大学へ要求した。1936年8月、児玉作左衛門北大教授はバフンケの墓を暴き、遺骨を同大医学部に私蔵していたからだ。2018年7月、北大は同遺骨の和保氏への返還を決定するも、詰めの折衝が断続する間にコロナ禍が出来、折衝は中断されていた。和保氏は死の床で、同事業の未完を痛悔やんだに相違ない。

(井上紘一、北大名誉教授、会員、遺影 木村家提供)

川染雅嗣さんのリサイタルを聴いて

島崎 昭



美唄市での川染雅嗣さんのリサイタル（後援事業）に安藤先生とご一緒した帰路、非会員の私に演奏会について寄稿をと依頼された。生来筆不精で、演奏の評論ができるほどの専門性もないが、充実して素晴らしいリサイタルで、会員の皆様にもこの雰囲気をもっと共有していただきたく敢えて筆を執った。

爽やかな風がやさしく肌に触れる秋晴れの一日、緑いっばいの中に造形美が広がる安田侃彫刻美術館アルテピアッツァ美唄で去る9月10日、副題に「彫刻を聴く～石の声に耳を傾ける」とある川染雅嗣さんの2年ぶり3回目のリサイタルに約100名の聴衆が集い、心地よい調べに聴き入った。

会場は、旧美唄市立栄小学校の小さな体育館だったアルテピアッツァアートスペース。当日は時間があって演奏をリハーサルから聴くことができた。天井が高い造りのこの会場は音響への配慮がないこともあり、リハーサルでは音がかなり響いて、というより響きすぎて懸念されたが、本番では聴衆が入って余計な音が吸収され「子供の情景」の一曲目「見知らぬ国」の一音目から素晴らしい音色に変化していたのには驚かされた。

当日のプログラムは、前半がシューマンの「子供の情景」Op.15、ブラームスの「2つのラプソディー」Op.79、シューベルトの「幻想曲」へ短調 D.940の3曲、休憩を挟んで後半はオールショパンで「ノクターン」ロ長調 Op.62-1、「4つのマズルカ」Op.24、それに「幻想ポロネーズ」変イ長調 Op.61の3曲という組み合わせであった。

余談になるが、こうしたリサイタルを開く際、演奏者はどのような意図をもって選曲し曲目構成を決めるのか、一度尋ねてみたいと常日頃思っている。ちなみにこの日のプログラムでは1828～79年の50年間に作曲された曲が演奏された。

懐の深い、安らぎと安心を与える演奏

川染さんの丹精込めた演奏は今回も安定しており、安心して聴くことができた。派手ではないがホッとすると時を与えてくれる。それは、ピアノの確かなテクニックはもちろんのこと、美術や文学などにも造詣が深いことが音楽性を豊かにし、社会の動きにも敏感で積極的に行動を起こし、かつ年齢を重ね様々な人生経験を経て人間的にも内面的にも成熟したというしっかりした基盤の上に醸し出される演奏が、懐の深さとともに安らぎと安心を与えてくれるのだと感じている。

「子供の情景」は13曲で構成されているが、最

後の「詩人は語る」の標題のように大人が自分の子供の頃に抱いた思いや体験を子か孫にやさしく語りかけるような気持ちで演奏されるというイメージを私は持っているが、今回の演奏はそれをベテランらしく見事に再現してくれたと思う。

有名なブラームスの2曲のラプソディーは骨格のしっかりした力強く情熱的な演奏でまとめてくれた。

連弾曲のシューベルトの幻想曲では、毎回共演されている美唄市出身のピアニスト柝原享子さんが高音パートを受け持った。十数分に及ぶ曲で歌曲王シューベルトが亡くなる年に書かれた哀愁を帯びたメロディーを、情感こめて表現された柝原さんの演奏を川染さんが支えるように暖かく包み込んでいたのが印象的であった。=左上写真(提供 柝原)=

後半のショパンの作品「ノクターン」Op.62-1は地味であり演奏会で聴く機会はないが、昨年のショパンコンクールの一次予選では出場87名中15名、二次予選では1名が演奏したのですっかりお馴染みになった。この落ち着いた優しく味わい深い曲をしっとりとした響きで聴かせてくれ、二曲目の「マズルカ」Op.24では舞曲らしく軽やかなタッチで表現された。ショパン晩年の「幻想ポロネーズ」Op.61は彼の曲の集大成の一つだが、この日はじっくりと熟成された安定感のある音楽を聴かせてくれた。

アンコールには、ショパンの「エチュード」Op.10-3（「別れの曲」）と、柝原さんとの連弾でアルベニスの「パヴァーヌ=カプリース」の2曲が演奏された。

今回も演奏者の解説付きのリサイタル。いつもながらに川染さんは、演奏される曲の背景やエピソードを時には笑いを誘いながらわかりやすく解説し、多くの人に音楽の楽しさ、親しみやすさ、そして奥深さを提供してくれた。

私は、ピアノなどの室内楽の演奏は大きな会場よりも演奏者の息遣いの伝わる間近で聴くのが本来の姿と思っているが、この会場はまさにその意に沿うものであった。ここ美唄でのリサイタルは会場周辺の環境も相まっていつも幸福感に満たされる。今後もこのような心の安らぎを与えてくれる演奏を期待するとともに、川染さんの益々活躍を祈念してやまない。（しまぎきあきら、2022/11）

ヤドヴィガ・ロドヴィッチ博士と アマレヤ劇団&メノコモシモシのコラボ



2022年11月に札幌でヤドヴィガ・ロドヴィッチ博士とアマレヤ劇団&メノコモシモシのコラボによる二つのイベントが開催されました——23日に札幌文化芸術劇場 hitaru 3F クリエイティブスタジオにおいて《第102回例会》2022ポーランドとアイヌ女性の国際アート・プロジェクト「女は語る Mówi ONNA」、28日には2会場で《第103回例会》「ポーランドのロマン主義とは何か～ポーランド・アイヌ『祖霊祭』夜明け前/シンヌラッパ・ケンネニサツ」と題する複合イベントです。聴衆は、第102回例会が約80人、第103回は第一部40人、第二部60人、両方に参加した方20人という盛況でした。
(安藤厚、写真 尾形芳秀)

《第 102 回例会》2022 ポーランドとアイヌ女性の国際アート・プロジェクト

新作パフォーマンス「女は語る Mówi ONNA」

by アマレヤ劇団&メノコモシモシ (アイヌ女性会議)



《第 103 回例会》講演・朗読 & 劇的朗読

ポーランドのロマン主義とは何か ～ポーランド・アイヌ

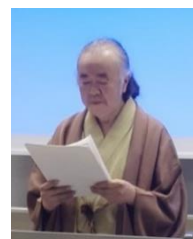
『祖霊祭』夜明け前/シンヌラッパ・ケンネニサツ



ポーランドロマン派の国民詩人アダム・ミツキエヴィチの詩劇『祖霊祭』をベースに、19世紀末から20世紀初頭の樺太・北海道におけるプロニスワフ・ピウスツキとアイヌの交流に思いを馳せつつ、ロドヴィッチ氏がオリジナルな脚本を仕上げました。1902年にピウスツキが記録した祖先への祈りの言葉も会場に響きます…

《第一部》(かでの2・7)

- ◆お話「ポーランド・アイヌ『祖霊祭』夜明け前/シンヌラッパ・ケンネニサツについて」
ヤドヴィガ・ロドヴィッチ=チェホフスカ(能の研究者、元駐日ポーランド大使)
- ◆講演: 関口時正(東京外国語大学名誉教授)「ポーランドのロマン主義」
=次頁の当日配布資料を参照=
- ◆朗読『祖霊祭』第2部(アダム・ミツキエヴィチ作・関口時正訳)
林家とんでん平=右上写真=(一人9役)コロス、祭司、老人、天使、亡霊(声)、夜の鳥たちのコロス、大鴉(おおがらす)、木菟(みみづく)、娘



《第二部》(シアターZOO)

- ♪劇的朗読「ポーランド・アイヌ『祖霊祭』夜明け前/シンヌラッパ・ケンネニサツ」
 - ◇作・芸術監督: ヤドヴィガ・ロドヴィッチ=チェホフスカ
 - ◇翻訳: 日本語 関口時正 / アイヌ語 多原良子
 - ◇出演: メノコモシモシ (加賀谷京子、多原良子、榎木貴美子、河波まさ子)
アマレヤ劇団 (カタジナ・パストウシヤク、アレクサンドラ・シリヴィンスカ、ナタリア・ヒリンスカ)=右下写真=
 - ◇音楽作曲: アンナ・イグナトヴィチ=グリンスカ、ヨアンナ・マクラキエヴィチ
 - ◇プロニスワフ・ピウスツキの声: マレク・ブガイスキ



(写真 安藤厚)

ポーランドのロマン主義

～ミツキエーヴィチ作『祖霊祭』の役割と意義

関口 時正



関口時正教授の貴重な講演が実現 (写真 尾形秀秀)

ポーランドの国会下院は2022年を「ポーランド・ロマン主義200年」を祝う記念の年に制定した。詩人アダム・ミツキエーヴィチ Adam Mickiewicz (1798-1855)は、200年前の1822年に『詩集第一巻』いわゆる『バラードとロマンス』をヴィリニウス(現在リトアニア首都)で出版した。

『バラードとロマンス』と『祖霊祭』

日本語訳は2014年未知谷(みちたに)刊。集中最も長いバラード「百合の花」は、354の七音節詩行が連続する切迫したリズムと、感傷を排し、被支配階層の視点から語る、文字通り革命的な傑作。

『バラードとロマンス』の世界はそのすべてが、ベラルーシの三つの町ノヴォグルデク、ミール、バラノヴィーチェを結んだ各辺50kmにも満たない三角形の内側におさまる。

翌1823年、詩劇『祖霊祭』(第二部・第四部)が『アダム・ミツキエーヴィチ詩集第二巻』としてヴィリニウスで刊行され(日本語訳『祖霊祭 ヴィリニウス篇』2018年未知谷刊)、この二冊の詩集によってポーランドのロマン主義が始まった。

バラードと『祖霊祭』第二部に共通する最大の特徴は、すべてにおいて、民間に伝わる物語や歌謡が素材となっていることである。後者については作者自身、作中の「儀式的歌謡、まじない、呪歌などはほぼ忠実に、時として文字通り、民衆詩から採って来た」と書いている。その「民」とは、ポーランド語ではない言語を母語とする人々だった。バラードも『祖霊祭』も、現在のポーランド共和国領土には含まれない、リトアニア、ベラルーシ、ウクライナにまたがる旧東方領土にリアルな根拠を有するものでありながら、支配者であるポーランド人の言語によって記述された世界なのである。ミツキエーヴィチはワルシャワもクラクフも知らない。

今一つ、バラードと『祖霊祭』に共通する重要な特徴は、生者の世界における死者の記憶の現存、あるいは死者のテキストとの交流だろう。

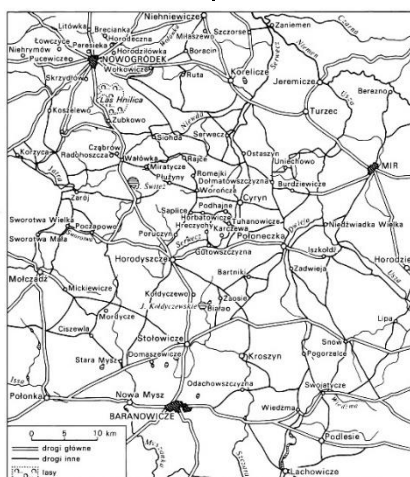
「大亡命」の時代

1830年11月2日、フリデリク・ショパンはワルシャワを立ち、イタリアをめざす旅に出るが、その後

の11月29日、帝政ロシアの支配に叛逆する戦争、「十一月蜂起」(「革命」ではない)がワルシャワで始まる。蜂起は翌年秋に鎮圧され、このことはポーランド人の精神世界に甚大な影響を及ぼし、彼らのロマン主義も変質する。知識人のいわゆる「大亡命」開始(岩波書店刊『ショパン全書簡 パリ時代 下』p.6

09-627「ポーランド人の《大亡命》とシヨパン」参照)。

変質したロマン主義は、もはや外部からは解読が不能な符牒や修辞に溢れることになる。その変貌の中心には再びミツキエーヴィチの『祖霊祭』第三部があった(1832年パリで出版)。ポーランド独自のロマン主義が生まれた背景に、21世紀の現在から二つの要因を見るとすれば、民族主義(あるいは国民国家の強迫観念)と社会進化論の極大化があったと言えよう。



Nowogródzka Mickiewicza

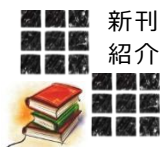
マウリツィ・モフナツキ Maurycy Mochnacki (1803-1834)の言葉～

遂に藝術について書くのはやめるべき時が来た。我々の脳裏に、胸中に今あるのは別のことだ。我々が即興してみせた民族蜂起～これ以上素敵な詩があるだろうか! 我々の生～それ自体がすでに詩だ。武具のざわめき、大砲の唸り声～これからはそれが我々のリズムであり、メロディだ。(…)僕はこの第一巻最後の数頁を、震える手で、胸震わせながら、「11月29日」の数日前に書いていた! 不安な刻限だった。僕の耳には鉄鎖の擦れる音が聞こえていた。胸のうちには(僕にはあまりにもおなじみの)牢獄の哀愁が霧のようにたれこめていった。

1830年12月14日、ワルシャワにて記す (みすず書房刊、関口時正『ポーランドと他者』p.93)

1863年1月、ワルシャワで「一月蜂起」勃発(～1864秋)。制圧の結果、文化史にいうポズィティヴィズム(pozytywizm)の時代始まる。(せきぐち・ときまさ)

(図出典) Adam Mickiewicz, oprac. S. Makowski, E. Szymanis, Warszawa 1992, p. 92.



『日ソ戦争 南樺太・千島の攻防』

～領土問題の起源を考える』

富田武（著） みすず書房 2022.7



第2次大戦末期に始まった日ソ戦争の最後の戦場となった南樺太・千島。そこでは、終戦の詔が出た8月15日以降も戦闘が続き、ソ連軍が千島占領を終えたのは、日本による降伏文書調印後の9月5日だった。本書は、南樺太・千島の攻防を総括的に論じた初めての著作だ。同著者による「日ソ戦争1945年8月～棄てられた兵士と居留民」（みすず書房、2020）の続編にあたる。

日本語、ロシア語、英語の多岐にわたる膨大な資料を読み込んでまとめられた本書には、二つの際立った特徴がある。まず、米ソ間の秘密外交や日ソの軍事作戦など、権力者の動きだけでなく、それに翻弄（ほんろう）される兵士や民間人の体験も描いたことだ。次に、抑留、引き揚げ、領土紛争など、戦争から派生して戦後に長期化した諸問題も取り上げたことだ。

秘密外交と軍民の悲惨な記録

北海道北部（留萌と釧路を結ぶ線の北側）の占領をソ連が断念する経緯や、太平洋への出口確保のためにクリル（千島）全島の領有を強引に押し進めるソ連の動きは、北方領土問題の起源の再考を促すものだ。

戦闘場面はすべて、日ソ双方の記録を突き合わせる形で提示されるので、客観的な戦況がわかる。南樺太の日本兵は、爆雷を抱えて敵戦車に飛び込む肉薄攻撃を命じられた。これとまったく同じ人命軽視の「肉攻」を、ソ連軍もまた北千島で日本軍相手に行ったことに驚かされる。

戦禍にある民間人の様子も、生々しく伝わってくる。南樺太には、逃避行を諦めて心中した母親と子ども5人の凄惨（せいさん）な姿がある。ソ連軍上陸に仰天して、必死に根室支庁に指示を仰ぐ南千島住民の多くは、結局ソ連軍の支配下に取り残された。その一方で、南樺太の過酷な収容所生活やソ連統治下の択捉島ですら、日本人とソ連人の間に友情や信頼が生まれることもあったという。

現在なおウクライナで続く戦争を思えば、本書が提起する問題は決して過去のものではない。戦争がいかに多くの禍根を残すか、今一度思い起こさずにはいられない。

（黒岩幸子、岩手県立大特命教授）

北海道新聞2022/9/4より再掲

かつての樺太、千島列島、そして北方四島は77年前にソ連に奪われ、すっかり過去の問題のように見られ、もうその事実さえ知らない世代が大半となっている。そんな時にロシアが隣国で同じスラブ民族のウクライナに突如侵攻した。差し迫った問題は何もないのに、勝手な妄想や嘘をデッチあげて侵攻したのだ。彼らは19世紀クリミア戦争で中東への出口確保を狙った侵略戦争が失敗に終わったことを忘れてはいないのだ。一週間もすれば終わると安易に考え侵攻を始めたが、九カ月たった今も終息の兆しは見えない。これは平和ボケの日本に覚醒を迫るようにもみえる。

この種の本はもう出ないと思っていたが、ロシアのウクライナ侵攻の最中、忘れ去られようとしていた矢先に警鐘のようなタイミングで出版された。元島民としては、あの樺太へのソ連の侵攻の悪夢が思い出された。ロシアのウクライナ侵攻の様子はソ連軍の樺太侵攻と全く同じ構図なのだ。

ソ連侵攻の悪夢～元樺太島民の視点

これをみて思い出すのは「日ソ中立条約」がありながらソ連がヤルタ会談に加わり、樺太、千島列島、北方四島の領有を密かに画策していたことだ。それに対し日本はその事実を知りながら無視して、愚かにもソ連に終戦への斡旋を依頼したのだから、ソ連がそれを見逃すはずはなかった。日本はソ連にすっかり弱みを握られていたのだ。

日ソ中立条約の締結からソ連参戦に至る推移をみると、日本がポツダム宣言を無条件で受諾した後もそれを無視し、国際法も無視して侵攻を続けたことは許されるものではない。ソ連も連合国の一国として宣言に加わった以上、米英と同じように日本の8月14日ポツダム宣言受諾で停戦すべきだったのだ。それを一切無視して無抵抗の樺太や他地域へ侵攻し続けたことは決して容認できない。もしそれが容認されるなら、日本にもソ連と同じ手法が許されることになる。

本書の特徴は日ソ双方の最新の資料を使って時系列で示したことで、従来のものより具体的で説得力がある。この侵略戦争に関する多くの資料の引用だけではなく、日本のスタンスを明確に示したことは類書にない点だ。こうしてあのソ連の侵攻の問題点を改めて浮かび上がらせてくれた。今後これ以上のものは出ないだろう。

改めて、ソ連の樺太侵攻やロシアのウクライナ侵攻は大きな教訓を与えてくれたことを銘記しておきたい。日本はこの侵攻を他所事ではなく我がこととして学ぶべきと考える。

（尾形芳秀、会員）

ポーランド断章

先川 信一郎

私が記者時代に初めてポーランドを訪れたのは、1983年12月でした。自管理労組「連帯」のレフ・ワレサ委員長のノーベル平和賞受賞が決まり、民主化のうねりの中で「連帯」が政治の表舞台に出てきたころです。厳冬の中、東欧全体が社会主義体制の崩壊を予感する人々の熱気と緊張感に包まれていました。



当時、ヤルゼルスキ政権が恐れていたのは「連帯」を率いる“鉄の男”、ワレサ委員長です。グダンスクのレーニン造船所の電気工だった彼は、政府の弾圧に屈しない「最も危険な人物」として何度も拘束され、当局の厳しい監視下に置かれていました。

言論の自由は制限され、慢性的な経済危機の中で、公共放送から聞こえてくるのは、政府のプロパガンダばかりです。それでも彼が発する「一人の人間にも事態を変える力がある」といった率直な言葉は、口コミや非合法文書で全国に伝わり、人々に勇気と希望を与えていました。

もしこのタイミングで世界が見守るワレサ氏に会えれば、大ニュースになるのでは——私は大胆にもこう考え、慎重に情勢を探りました。現地に詳しい関係者からは「取材はどうも無理」「捕まって強制退去になるのがオチ」といった悲観的な答えばかりが返ってきます。ですが、せつかくポーランドにいるのです。あきらめるわけにはいきません。街を歩く人々の話を聞きながら、時代が動いていることを肌で感じていました。

突撃取材を決行

記者は、時として歴史の転換点に遭遇することがあります。ロシア十月革命を経験し「世界を揺るがした10日間」を著したジョン・リードしかり。毛沢東と会見し「中国の赤い星」を書いたエドガー・スノーしかりです。

こうなったらアポなしの突撃取材しかない。逮捕されても数日の拘束だけだろうと腹をくくり、通訳の青年と列車でグダンスクに向かいました。目立たぬよう薄汚れた労働者風の服を着ていましたが、今思えば気分はミッション・インポッシブルのトム・クルーズです。

グダンスクでは、委員長が住む4階建ての質素なアパートを突き止め、周囲の下見をしました。望遠レンズで覗くと、出入口にパトカーが2台。目指す2階への階段は一つ。見張りの警察官が交代する時間は午後4時…。事前に「連帯」のメンバーから聞いていた通りです。「これまで、アパートの前で何人もの外国人記者が拘束された。気を付けるように」と言われていました。

チャンスは午後4時です。翌日夕、警察官が交代した際にダッシュでアパートの2階に駆け上がりました。ドアを「ドンドン」と叩くと、ボディガードらしき青年が

ドアを少し開け「委員長はクリスマス休暇中だ。だれにも会わない」と言い放ち閉めようとしています。私も必死です。ドアを手で押さえ「日本から来たんだ。5分でもいいから会いたい」と食い下がると「少し待って」といったん引っ込んでから、部屋に通してくれました。

ちょっとした事前の行動が功を奏していたようです。前日、外で絨毯のほこりを払っていたダスタ夫人に「ノーベル平和賞受賞おめでとうございます！北海道新聞の記者です」と挨拶し両手いっぱいのガーベラの花束を贈っていました。そのことに気が付いたようです。

政府交渉に意欲

昼寝から覚めたばかりのワレサ氏は、えんじ色のセーターを着ていました。応接間の壁には、ポーランド出身のローマ教皇ヨハネ・パウロ2世の写真が飾ってあります。がっちと握手してくれ「わざわざ日本から来てくれたのか。さあ、なんでも聞いてくれ」と通訳を介し上機嫌で質問に答えてくれました。

日本の協力を謝意を述べた後「今の段階は、以前とはちょっと違う段階に入っている。(連帯は)政府には承認されていないし、公式な活動をする権利も持っていない。でも、この問題は、解決できる種類のものだ」、さらに「遅かれ早かれ(政府との)話し合いのテーブルにつくことになるだろう。必ず話し合いは実現できるし、21世紀になればすべての問題が話し合いで解決できると信じている」と語り、政府との交渉に前向きだったのが印象的でした。

部屋は盗聴されているので、この会話は秘密警察に筒抜けだったはず。長居は無用。早々に取材を切り上げ、タクシーに飛び乗りました。いつ拘束されるか。尾行はいないか。ドキドキしながら無事に逃げ切りました。

最近わかったことですが、翌84年に1人の日本人学生が同じくワレサ委員長のアパートを訪ねました。しかし、彼は出口で逮捕され、一晚留置場で過ごしたそうです。罪状はパスポート不携帯。その学生とは、ワルシャワ中央計画統計大学に交換留学していた若き日の河野太郎氏(衆議院議員)でした。

ピウスツキ兄弟

グダンスクを後にした私は、次にクラクフやポズナン、ザコパネを訪ねました。各地の科学アカデミーの民族学者やアダム・ミツケビッチ大学(AMU)の研究者を取材し、帰国後に「ロウ管の歌」(道新選書、1987)という本にまとめました。

これは、ロシア皇帝暗殺事件に連座して樺太に流刑となったポーランドの人類学者ブロニスワフ・ピウスツキ(1866~1918)の数奇な生涯を追った物語です。彼が樺太流刑時代に録音した樺太アイヌ語のロウ管レコードは、言語学的に大変貴重なものでした。それをポーランドと北大を中心とした研究者が連携し“幻の音声”の復元に成功したのです。

ちなみに、ブロニスワフの弟が、ポーランド独立運動を指導した救国の英雄ユーゼフ・ピウスツキ(1867~1935)です。ユーゼフは第一次大戦の混乱を経て1918年に初代国家元首となります。1920年のソヴィエト・ポーランド戦争で、ソヴィエト・ロシア支配下にあったウクライナのキーウまで進撃しましたが、戦線が伸びすぎて赤軍に敗退。逆にワルシャワ近郊まで攻め込まれます。ここでユーゼフ自らが先頭に立ち、背後から赤軍を包囲して撃退します。“ヴィスワ川の奇跡”といわれる大逆転勝利でした。これによりポーランドは分割前の国土を回復します。

さて、現在に話を戻すと、ポーランドの隣国ウクライナでは、侵攻したロシア軍との間で激しい消耗戦が続いています。SNSからは、虐殺やレイプ、焦土作戦の悲惨な状況が伝わってきます。この戦争は民間人をも標的にし、民族のアイデンティティーばかりか、歴

史と文化の破壊を狙っています。つまり、「停戦」したとしても、ロシア軍がウクライナ領内に留まっている限り残虐行為が続き、平和はあり得ないのです。

ウクライナのゼレンスキー大統領は「もっと武器の供与を」と西側諸国に訴え、徹底抗戦の構えをみせています。時代こそ違え、私にはゼレンスキー大統領とユーゼフ・ピウスツキの姿が重なって見えます。

民衆蜂起を訴え

ところでウクライナ情勢に関連し、ワレサ氏は7月8日、フランス・テレビとのインタビューで「ウクライナが戦争に勝ったとしても、5年後には同じことが起こり、10年後には別のプーチンが出てくる。そうならないためには、モスクワの政治体制を変えるか、ロシア連邦をバラバラに解体し人口を5000万人以下に減らすしかない。プーチン政権を倒すには各共和国の民衆が蜂起するよう組織化することが必要だ」と述べ、連邦を構成する共和国に蜂起を呼びかけました。この発言にロシア政府関係者は激怒し、報復としてワレサ氏の首に500万ドルの賞金をかける提案を行ったそうです。彼はこれを面白がり、Facebook にボディガードを連れて平然と教会に通う様子をアップしています。

ワレサ氏にかつてのような政治的影響力はないと思っていたのですが、ポーランド元大統領の発言とあって、ロシア側も無視できなかったようです。「私が恐れるのは神のみ。そして、ほんの少し恐れるのは妻」と語るなど、78歳の今でも“鉄の男”は健在です。(さきかわ・しんいちろう、高知工科大学客員教授、会員)

《エッセイ》

葛は葛でも

嵩 文彦

葛はマメ科クズ属、ツル性の繁殖力旺盛な多年草で、北海道にも生育すると文献には出ていますが、目にした記憶がありません。根は葛粉になり、風邪薬としてポピュラーな葛根湯の原料にもなっています。一八七六年(明治九年)アメリカのフィラデルフィアで独立百年祭博覧会が開かれたとき、飼料用作物、園芸装飾用植物として日本から持ち込まれ、荒地の緑化や堤防の土壌流出防止に用いられているうちに広がりすぎて、侵略的外来植物としていまだに排除されつつけているそうです。北海道はいくら温暖化が進んでいるとはいえ葛には繁殖条件がよくないでしょう。

葛は大和国の吉野川の上流の国栖(クズ)の人が売り歩いたので吉野の葛として有名になったと文献にあります。吉野川にはクズと呼ばれる所は二か所あり、上流のクズには「国栖」、下流のクズには「葛」が当てられています。「国栖」のほうは皇位継承を巡る争いがテーマになった能のタイトルになり、見事に京の

文化に取り込まれました。

かつては吉野・熊野一帯「まつろわぬ民」の住む土地でした。土蜘蛛(土雲)、国栖八握脛(八束脛)(くずやつかはぎ)というような蔑称で文献に出てきます。恐らく吉野の異属のほうが熊野よりも早く朝廷に恭順したのでしょう。また吉野は勅撰集いらい歌枕になって人口に膾炙しました。熊野の反抗精神は衰えませんでした。南北朝の争乱のときも熊野の民衆は南朝に味方したものが多かったのです。歴史の通り南朝は北朝に敗れますが、南朝の高貴な身分の人物が、山里深く隠れ住むというロマンを生みました。

そもそもクズは「屑」に通じる音です。また熊野にはガケ、コケと呼ばれる地名もあり、歴史の根はかなり深いのです。

「吉野葛」と聞くと「吉野でとれた葛粉」を思うのが普通です。実はこれ、谷崎潤一郎の小説のタイトルです。

「私」は南北朝の争乱を南朝の側から描いたロマン

にしようと、母親が国栖出身の友人の伝手で情報を得て、現地を見なくてももう小説はかけるほど資料が揃っているのですが、その友人の母方の家系のさらなる調査に国栖を訪れるのに同行します。実は友人の母方の家は没落し、少女は遊郭に売られますが、ほどなく友人の父になる青年に見初められて結婚し、友人が誕生することになります。ここには母の出自に負い目を抱く青年は出てきません。差別意識を纏った人物は一人も現れません。

この小説の最後は「私」の友人が母方の伯母の孫が

紙漉きの冷たい水で手指を真っ赤にして働いているのを見て、好意を抱きます。「(略) 吊り橋の上から、／「おーい」／と呼んだ者があった。見ると、津村が、多分お和佐さんであろう、娘を一人うしろに連れてこちらへ渡って来るのである。二人の重みで吊り橋が微かに揺れ、下駄の音がコーン、コーンと、谷に響いた。」

谷崎はなぜ重い歴史の積み重なる吉野を舞台に、それには一切触れることなく、このような小説を書こうとしたのでしょうか。差別という業と無縁のさわやかな青年を登場させて。(だけ・ふみひこ、会員)

《私信》

身体楽器論～若い友人の新作に寄せて

井上 紘一

金子遊 様

我が家近くの愛育病院に2泊3日で入院しました。早朝の定期検査を済ませて帰宅後、遅い朝食中に突如として下腹部を激痛が走り、七転八倒の苦痛に堪え切れず病院へ舞い戻りました。またもや一巻の終わりか、と観念した次第です。

CTスキャン、エコー、レントゲン検査の末、「S結腸軸捻転腸閉塞」と診断されました。いわゆる腸捻転由来の「糞づまり」という奴だったようです。応急措置として大腸内視鏡による検査と、捻転した結腸の原状回復が試行された結果、幸運にも施術は奏功、7時間に及んだ激痛との闘争には終止符が打たれた次第です。即入院でした。

* * *

一件がゴールデンウィーク前日に出来たのも不幸中の幸いでしたが、この3日間を御高著『マクロネシア紀行』とともに過ごせたのはまことに僥倖でした。(金子遊著『マクロネシア紀行～「縄文」世界をめぐる旅』東京:アーツアンドクラフツ刊、2022.4)



発見①あなたの御母堂が全共闘世代のフェミニストであられたこと。当時の小生は大学院在籍中でしたから、母上よりやや年長のようなのですが、いずれにせよ小生とあなたの間には親子ほどの年齢差がある事実を改めて痛感した次第です。

発見②あなたが作品中でさりげなく吐露された信条。「…現場までいき、自分の足で歩き、眼で見て、耳で聴いて、においを嗅いで、他人の声やメディアを媒介することなく、自分の身体を反響する楽器のようにして感じとらなくてはならない」(p.114)

* * *

小生は端なくも、1990年代によく実現したシベリアでのフィールドワークを想起しました。「トナカイ飼育

民の生き残り戦略」を掲げた小生は、ヤクーチヤのエウエン、イルクーツク州北方のエウエンキ、北サハリンのウイлта、ウラル山脈東麓のコミを歴訪しました。しかしソ連崩壊後の混沌たる政治・経済・社会情勢下で見出したのは、各自が己の生存を賭して闘う修羅場です。

フィールドワーカーとしては些か臺の立った初老の小生を、現地の人々は温かく迎え入れ、対話にも誠実に応じ、生き様をさらけてくれました。だが如何せん、彼らは掛け値なしの生存闘争中でして、一切の生き残り戦略も展望できず、軒並みに滅びの諦念を吐露するばかり。確かに、当面の生存を辛うじて支えていたのはトナカイ飼育にほかなりませんが、御先祖様に倣って、これを元手に再出発を図る意欲は、まことに遺憾ながら見出せなかった。70年にわたる国家の「おんぶに抱っこ」体制下の就業に馴染みすぎたせいで、経済が破綻し国庫補助金がなくなると、路頭に迷う以外になかったわけです。(ソ連期の彼らは御先祖様のような自立した事業主ではなく、国営企業に勤める被傭者にすぎなかった)

小生の身体楽器は彼らの絶望・苦悩・諦念を切実に把握したもの、たまさか居合わせた遠来の研究者にできることは極めて僅かで、ひたすら対話者に寄り添いその語りに耳を傾けるほかありませんでした。

北大スラブ研究センター長のお鉢が回ってきた1998年、フィールドワークに割く余裕がなくなって、シベリア調査を打ち切りました。とりわけ注力したエウエンキとウイлтаの事例は、既に存亡の危機に瀕していましたから、「生き残り戦略」の模索も見果てぬ夢と化した次第です。こうして小生のシベリア・フィールドワークは、所期の目的を達成することなく挫折を余儀なくされました。

* * *

目下進行中のウクライナ戦争は、外国人によるシベリア現地調査を30年ぶりに中断させることになるでしょう。この中断もやはり長丁場になりそうです。

(いのうえ・こういち、札幌、2022/5/2)

第36回定例総会議事録

(議長 尾形芳秀)

2022年10月30日(日)札幌市・豊平館において第36回定例総会を開催し(出席者20人・委任状49通/会員数99人)、以下の議案について審議し、各議案とも過半数の賛成を得て議決されました。

[第1号議案]2022 年度(2021.9-2022.8)活動報告について(ラファウ・ジェブカ)

1.《第 35 回定例総会》&《第 99 回例会》第 10 回朗読会「午後のポエジア」動画鑑賞会、札幌エルプラザ 4 階中研修室、2021 年 10 月 31 日(日)総会 13:30～、例会 15:00～(参加者)総会 13 人、例会 21 人(うち会員 17 人)

2.例会等

(1)《第 100 回例会》ポーランド名画ビデオ鑑賞&交流会『赤い闇～スターリンの冷たい大地で』2019 アグニェシュカ・ホランド監督、お話:池田光良、札幌エルプラザ 4 階中研修室、2022 年 6 月 1 日(水)18:30～、参加者 23 人(うち会員 12 人)

(2)《第 101 回例会》第 11 回朗読会「午後のポエジア」、札幌エルプラザ 4 階中研修室、7 月 3 日(日)13:30～、参加者 32 人(うち会員 22 人)

3.会誌 POLE no.104(2021.9.1), no.105(2022.1.10), no.106(5.20)発行

4.運営委員会①2021.10.18②2022.4.13③7.11

5.後援事業等

(1)〈後援〉徳田貴子ピアノリサイタル～心躍る音楽の贈り物、札幌 ザ・ルーテルホール、2021 年 11 月 13 日(土)／恵庭 夢創館、11 月 7 日(日)／中札内 文化創造センター ハーモニーホール、8 月 29 日(日)

(2)〈協力〉オンラインコンサート③〈シロンスク〉舞踊団との旅 Podróże ze Śląskiem、9/22

(3)〈協力〉オンラインコンサート④「シロンスク」舞踊団 Zespół „Śląsk”クリスマスキャロル&クリスマスソング「聖なる夜」コンサート Koncert Kolęd i Pastoralek "Święta Noc"、12/16

(4)〈協力〉♪アマレヤ劇団 Amareya Theatre & Guests オンラインイベント 2021 ②遊牧的展示「女は語る Mówi ONNA」の開会、12/18 ③「アイヌとカムイのためのレクイエム Requiem dla Ajnu i Kamui」初演、12/30

(5)〈協力〉「シロンスク」舞踊団 Zespół „Śląsk”動画:ポーランドの民族衣装①ロズバルク・ブイトム地方と②チェシン地方のコスチューム Kostium Rozbarski; Cieszyński、2022/4/11

(6)〈協力〉ブロニスワフ・ピウスツキ 104 年忌(献花、安藤厚会長、井上紘一会員参加)、ウポポイ(民族共生象徴空間)記念像前、5/17

6.会員動向(2022 年度)入会 8 人、退会 4 人(2022.9.1 現在)会員数 98 人

[第2号議案]2022 年度収支決算報告および会計監査報告について(園部真幸・稲川和幸・嵩文彦)別紙参照

[第3号議案]2023 年度(2022.9-2023.8)役員等(案)について(安藤厚)

(会則第 6 条に基づく役員)

新任

会 長:安藤厚

副会長:霜田千代麿、塚本智宏

運営委員:新井藤子、安藤むつみ、池田光良、氏間多伊子、小笠原正明、柏木由美子、熊谷敬子、小林浩子、坂田朋優、佐々木保子、霜田英麿、園部真幸、徳田貴子、中島洋、アグニェシュカ・ポヒワ、松山敏

事務局長:ラファウ・ジェブカ

監査委員:稲川和幸、嵩文彦

(会則第 15 条に基づく事務局、委員会等)

事務局:(事務局長)ラファウ・ジェブカ、(副事務局長・会計)園部真幸、(催物)氏間多伊子、(同)熊谷敬子
編集委員会:安藤厚、新井藤子、池田光良、氏間多伊子、熊谷敬子、松山敏

広報委員会:安藤厚、新井藤子

(会則第 16 条に基づく東京事務所)

(所長)霜田英麿、(副所長)熊倉ハリーナ

[第4号議案]2023 年度活動計画について(ラファウ・ジェブカ)

1.《第 36 回定例総会&創立 35 周年祝賀会》豊平館、2022 年 10 月 30 日(日)

2.例会等

(1)《第 102 回例会》新作パフォーマンス「女は語る Mówi ONNA」アマレヤ劇団&アイヌ女性会議メノコモシモシ、札幌文化芸術劇場 hitaru 3F クリエイティブスタジオ、11 月 23 日(水)

(2)《第 103 回例会》①講演「ポーランドのロマン主義～ミツキューヴィチ作『祖霊祭』の役割と意義」関口時正／朗読『祖霊祭』林家とんでん平、かでる 2・7②劇的朗読「ポーランド・アイヌ『祖霊祭』夜明け前/シンスラツパ・クネニサツ」作・芸術監督ヤドヴィガ・ロドヴィッチ＝チェホフスカ、出演メノコモシモシ&アマレヤ劇団、シアターZOO、11 月 28 日(月)

(3)紙芝居「ブロンシ・ピウスツキ」の増刷と寄贈

(4)創立 35 周年記念演奏会、札幌コンサートホール Kitara、2023 年 6 月 3 日(土)

(5)午後のポエジア、名画ビデオ鑑賞会、ポーランドサロン等

(6)「シロンスク」舞踊団、ポーランド・アイヌ『祖霊祭』プロジェクト等への協力

(7)その他:後援・協力依頼には随時対応

3.会誌 POLE no.107(2022.9.1)、no.108(2023.1)、no.109(2023.5)

4.運営委員会:4 回程度

5.オンライン広報(Facebook, Twitter 等)の充実

[第5号議案]2023 年度予算(案)について(園部真幸)別紙参照

[第6号議案]その他

2022年度 収支決算書 (自2021年9月1日～至2022年8月31日)

○一般会計

【収入の部】

(単位:円)

	決算	予算	増減	備考
会費	245,500	240,000	5,500	納入率85%
寄付金	58,000	60,000	△2,000	
雑収入	5	8	△3	貯金利子
小計	303,505	300,008	3,497	
前年度繰越金	511,432	511,432	0	
合計	814,937	811,440	3,497	

【支出の部】

	決算	予算	増減	備考
事業費	72,885	100,000	△27,115	35総会9,751、例会(97)9,311 (98)11,109 (99)13,814 (100)15,102、35記念コンサート1,498、36総会12,300
連絡費	51,678	100,000	△48,322	郵送:35総会外8,137、POLE(105)18,585 (106+)22,836、その他2,120
編集費	68,548	70,000	△1,452	印刷:POLE(104)14,155 (105)18,890 (106)21,008、チラシ5,145、本代9,350
会合費	4,368	20,000	△15,632	運営委員会(3回)
事務費	13,124	28,000	△14,876	インクカートリッジ、ラベル他
雑費	16,018	5,000	11,018	HP経費5,688、ピウスツキ忌式花10,165、振込手数料165
予備費	0	488,440	△488,440	
小計	226,621	811,440	△584,819	
次年度繰越金	588,316	0	588,316	
合計	814,937	811,440	3,497	

○特別会計

【協会創立35周年記念コンサート】

	収入の部	支出の部	備考
演奏部基金	71,767		
一般会計より充当	1,498		
準備経費		73,265	札幌コンサートホール施設利用料(前払い)
合計	73,265	73,265	

【午後のポエジア】 @2021.10.31 (99例会) @2022.7.3 (101例会)

	収入の部	支出の部	備考
助成金	100,000		ポーランド広報文化センター 50,000×2回
一般会計より充当	13,814		
開催経費(2回)		113,814	動画撮影・編集・制作外88,600 (@500,000 @38,600) 会場使用料@18,100 出演者交通費@5,000 その他@2,114
合計	113,814	113,814	

会計の監査にあたり、関係書類及び通帳を照合した結果、適正に処理されていることを確認しましたのでここに報告します。

2022年9月22日 監査委員
稲川和幸 印 / 嵩文彦 印

2023年度 収支予算案 (自2022年9月1日～至2023年8月31日)

(単位:円)

【収入の部】	予算	前年度決算	増減	備考
会費	249,000	245,500	3,500	3千円×83人(納入率85%)
寄付金	50,000	58,000	△8,000	
雑収入	4	5	△1	貯金利子
小計	299,004	303,505	△4,501	
前年度繰越金	588,316	511,432	76,884	
合計	887,320	814,937	72,383	
【支出の部】				
事業費	130,000	72,885	57,115	36総会7万、例会4回×1.5万
連絡費	80,000	51,678	28,322	ポーレ発送等(2.5万×3号)、その他5千
編集費	119,000	68,548	50,452	ポーレ(1.8万×3号)、紙芝居5万、チラシ等1.5万
会合費	6,000	4,368	1,632	運営委員会(4回)
事務費	15,000	13,124	1,876	用紙、文具、コピー外
雑費	16,000	16,018	△18	HP経費(前年度実績程度)外
予備費	521,320	0	521,320	記念演奏会経費立替含む
小計	887,320	226,621	660,699	
次年度繰越金	0	588,316	△588,316	
合計	887,320	814,937	72,383	

○特別会計

【紙芝居プロニシ・ピウスツキ】 2022.11.15

	収入の部	支出の部	備考
助成金	50,000		ポーランド広報文化センター
一般会計より	50,000		
印刷費		100,000	
合計	100,000	100,000	

【103例会】 2022.11.28

	収入の部	支出の部	備考
助成金	150,000		ユゼフ・ピウスツキ博物館、ポーランド広報文化センター
運営経費		150,000	会場経費、出演料
合計	150,000	150,000	

【創立35周年記念演奏会】 2023.6.3

	収入の部	支出の部	備考
助成金	150,000		
チケット売上	460,000		
運営経費		610,000	会場使用料、出演者交通費、印刷費、ピアノ調律費外
合計	610,000	610,000	

ポーランド&ニッポン歳時記 40(終)

ポズナンの津田晃岐さんから「妻のモニカが9月10日の朝(ポーランド時間)亡くなりました。抗癌剤治療を受けていたのですが、前日までいつもと変わらない様子だったのに、あっという間に逝ってしまいました」と悲しい知らせが届きました。

津田モニカさんは POLE 第70号(2011.5)以来10年以上にわたり本誌「歳時記」を主宰し、昨夏、晃岐さんと共編/訳/注で『夏目漱石～俳句 Natsume Soseki, Haiku z lat 1889-1895』を出版されました。

私はモニカさんをワルシャワ大学で、晃岐さんを北大でお教えしたことがあり、個人的にも悲しみに堪えません。心からご冥福をお祈りします。(安藤厚)



=POLE72 より=

春野菜スープレの味の円やかさ
雲の峰札幌句会ご夫妻で
秋桜は天国の門天に生る
ホトトギス同人、霜田千代磨
(モニカ津田様を深悼す)

例会等の予定

創立35周年記念演奏会、札幌コンサートホール Kitara、2023年6月3日(土)

会員動向 (2022.9~12)

入会:鈴木飛鳥、徳田和可(敬称略)

ご寄付 (2022.9~12) 感謝します!

(1口千円)(15)2018年後のポエジア参加者(7)霜田千代磨

(2)安藤厚・むつみ・瞬、川染雅嗣、栗原朋友子、佐々木保子、土橋芳美、村田雄穂、山本伸一(1)小山内道子、北口久雄、小林浩子、佐藤晃一、前田理絵、松永吉史、和田芳子(順不同)

年会費 (2022.9~2023.8) 納入のお願い

年会費:一般3,000円、学生1,500円

また、維持会費としてご寄付(1口千円:任意)も承ります。

【ゆうちょ銀行振替口座】記号02740 5 番号19735 【加入者名】北海道ポーランド文化協会

店番(279)預金種目(当座)店名(二七九[ニナナキョウ]店)口座番号(0019735)

または

[北洋銀行(本店営業部)普通預金口座][店番号]028[口座番号]0605084

[加入者名]ホッカイドウポーランドブンカキョウカイ(北海道ポーランド文化協会 会長 安藤厚)

※ご請求額は個別の納入依頼(振替用紙同封)をご覧ください。

※遠方の方はご寄付(年千円)で会誌 POLE の定期読者になっていただくこともできます。事務局にお問い合わせください。

POLE108 目次

ポーランド名作映画ビデオ鑑賞&交流会2023《第104回例会》『エロイカ EROICA』2/20

《第105回例会》『イマジン IMAGINE』3/13(池田光良).....	1
《第36回定例総会》《創立35周年祝賀会》報告(安藤厚)木村和保氏逝去(井上紘一).....	2
川染雅嗣さんのリサイタルを聴いて(島崎昭).....	3
《第102回・第103回例会》報告(安藤厚).....	4
ポーランドのロマン主義～ミツキューヴィチ作『祖霊祭』の役割と意義(関口時正).....	5
《新刊紹介》『日ソ戦争 南樺太・千島の攻防』(黒岩幸子、尾形芳秀).....	6
ポーランド断章(先川信一郎)葛は葛でも(嵩文彦)身体楽器論(井上紘一).....	7
第36回定例総会議事録(議長 尾形芳秀).....	10
《ポーランド&ニッポン歳時記》40(終)津田モニカさん追悼(安藤厚、霜田千代磨).....	12

 <p>発行 北海道ポーランド文化協会 〒060-0018 札幌市中央区北18条西15丁目3-19 安藤方 TEL・FAX 011-556-8834、hokkaidopolandca@gmail.com</p>	<p>ポーレ編集委員会</p> <p>安藤厚/新井藤子 池田光良/氏間多伊子 熊谷敬子/松山敏</p>
	<p>東京事務所 〒107-0052 東京都港区赤坂9-6-29-309 音響計画(株) 霜田気付 TEL 03-6804-1058 FAX 03-6804-6058</p>

POLE no.108 (January 2023)

Newsletter of the Hokkaido-Poland Cultural Association

Table of Contents

Announcement: Video screening of the Polish films: "Eroica" by Andrzej Munk on 20/02/2023 & "Imagine" by Andrzej Jakimowski on 13/03/2023 (M. Ikea)	1
Report: 36th Annual Meeting & 35th anniversary celebration on 30/10/2022 (A. Ando) / Mr. Kazuyasu Kimura-Piłsudski has passed away!!! (K. Inoue)	2
Masashi Kawasome's Piano Recital in Bibai (A. Shimazaki)	3
Report: New performance "Mówi ONNA" on 23/11/2022 & Dramatic recitation "Dziady polsko-ajnuskie/Przedświt - sinnurappa-kunne nizat" on 28/11/2022 (A. Ando)	4
Lecture on Polish romanticism: Role and significance of Adam Mickiewicz's "Dziady" (T. Sekiguchi)	5
(New Book) "Soviet-Japanese War. Battle of Southern Karafuto and Kuril Islands" by T. Tomita (S. Kuroiwa, Y. Ogata)	6
Essay on Poland (S. Sakikawa) Kudzu is Kudzu (F. Dake) Body Instrument Theory (K. Inoue)	7
Proceedings of the 36th Annual Meeting (Chairman: Y. Ogata)	10
Haiku Yearbook: Poland & Japan 40 (End): In memory of Monika Tsuda (A. Ando, Ch. Simoda)	12